

がん検診について（ご理解いただきたいこと）

令和4年3月

ダイキン工業健康保険組合

がん検診は、会社と健保の共同事業として実施しています（実施：会社、費用負担：健保）。
下記内容をご理解いただいた上での受診をお願いします。

●がん検診は、法令等による受診義務のない任意の検診です（受診の要否は各人が判断）

●がん検診には「メリット」と「デメリット」があります

ダイキン健保では厚生労働省のガイドラインを基本にして「がん検診実施基準（表1参照）」を定めています。がん検診には「メリット」と「デメリット」があり（表2参照）、各部位ごとにおおよそ受診のメリットがデメリットを上回る年齢から実施基準を定めています。

表1. ダイキン健保のがん検診実施基準

検査部位	ダイキン健保の基準 (健保が費用負担する範囲)		備考
	基準年齢	検査方法	
胃	50歳以上 ※希望により 30歳以上は受診可	胃部X線検査 ※希望により 胃内視鏡検査 への変更可	一番の罹患原因はピロリ菌の感染ですが、日本の衛生環境の改善により、発症者は年々減少傾向にあります。罹患率が増え始める50歳以上を基準年齢に設定しています。
大腸	40歳以上 ※希望により 30歳以上は受診可	便潜血検査 (2回法)	生活習慣の欧米化(高脂肪・低繊維食)により、罹患率は増加傾向にあります。一方、便潜血検査は偽陽性率(約4%が陽性)が高いことから、罹患率が増え始める40歳以上に基準年齢を設定しています。
子宮頸	20歳以上(女性)	子宮頸部細胞診	主に性交渉をきっかけとしたヒトパピローマウイルス(HPV)感染により発生するがんです。20代で罹患する場合もあり、20歳以上に基準年齢を設定しています。
乳房	30歳～39歳(女性)	超音波検査 (+触診)	罹患率が増える30歳以上に基準年齢を設定しています。検査方法は、罹患率と受診によるデメリットから39歳未満は超音波検査、40歳以上はマンモグラフィー検査としています。
	40歳以上の女性	マンモグラフィー (+触診)	

表2. がん検診の主なメリットとデメリット（日本対がん協会）

主なメリット	主なデメリット
<ul style="list-style-type: none">●早期発見、早期治療により命を守る●発見時の治療が容易●「異常なし」が確かめられた安心	<ul style="list-style-type: none">●がんが100%見つかるわけではない●結果的に不必要な治療や検査を招く●検査による偶発症の可能性 検査による事故、エックス線による被曝 等